

## 特別支援教育における人権教育

—障害者差別を題材とするまで—

### Human rights education in special needs education

—Until discrimination of people with disabilities is taken up in class—

中島 栄之介

Einosuke Nakajima

#### 要旨 (Abstract)

特別支援学校における人権教育について、兵庫県立A特別支援学校での実践例をもとに検討した。特別支援学校における人権教育は在籍する生徒が差別を受けてきていると同時に差別をする側にもなるという特徴がある。しかし、これまでの特別支援学校の人権教育は性教育などの男女共生教育が中心であり障害者差別を取り上げることは少なかった。A特別支援学校では継続的に人権教育を行うことを目的とし、人権教育の実践を積み重ね障害者差別を題材として取り上げるまでに至った。生徒にとって障害者差別を取り上げることは生徒にとって過去自らが受けてきた差別と向き合うことであり、自身の障害と向き合うこと、さらに今後受けるであろう差別と向き合うこと、そして、自らの持つ差別性と向き合うことでもあった。また、人権教育を継続していくためには、組織やシステムを構築するとともに組織やシステムを動かしていく人材の育成も継続的に必要であると考えられた。

**キーワード:** 特別支援教育、人権教育、障害者差別

#### 1. はじめに

兵庫県立A特別支援学校は、平成24年4月に開校した高等部単独設置の職業科の特別支援学校である。筆者はA特別支援学校の開校準備室より勤務し同学校での人権教育を進めることとなった。同校では開校して間もないころより、生徒の「ガイジ」という言葉を使っていることが気になっていた。「ガイジ」とは、障害児より派生したと思われる障害者に向けられた比較的新しい差別用語である。それまでの、身体障害者や知的障害者に向けられてきた差別用語に代わり子どもたちの間で使用され漫画などでも見られるようになり「自分たちは少し異なった子(人)を攻撃する言葉」として今日まで使われてきている。

「ガイジ」という言葉は、障害のない子どもたちから障害のある子どもたちに向けて使われることがほとんどである。しかしA特別支援学校の場合には①意味のわからないまま悪口として使う②自分よりも重度の障害者に対して差別的に使う③障害者に対する差別用語として使うという特徴を持つ。

具体的には①の例としては生徒どうしで『ガイジ』のくせに「おれは『ガイジ』違うおまえよりましや」②の例として近隣の福祉施設の利用者をさして「あいつ、『ガイジ』やな」③として、指導され興奮した生徒が「こんな『ガイジ』の学校やめたるわ、生徒も『ガイジ』やったら先生も『ガイジ』や」、などである。

これまで、新入生を含め生徒より多かれ少なかれ「ガイジ」という言葉を聞かない年はなかった。そのような実態がある一方で、人権教育の指導経験のある教職員は市町立の小中学校に勤務した経験のある教員以外にはほとんど在籍せず、人権教

育を担当する総務部でも人権教育とは何か人権教育研究協議会とは何かというところからの人権教育のスタートとなった。

## II. A特別支援学校における人権教育の取組み

### 1. 人権教育を始めるまで

A特別支援学校の特色として、①同一敷地内に同時に設置された兵庫県立B高等学校(以下高校)との交流および共同学習を積極的に推進している②知的障害を対象とし就労に向けた授業に重点を置いている、の2点があげられる。また、A特別支援学校は知的障害を対象とした学校であるが発達障害の特徴を持つ生徒も多数在籍している。なお、高校は近隣の定時制高校を発展的に統合した多部制単位制の高等学校で、在籍している生徒には様々な背景があり、発達障害の特徴を示す生徒や療育手帳を持つ生徒も在籍している。

A特別支援学校では、開校以来総務部を担当部署として人権教育に取り組んできた。しかし、これまでの特別支援学校(知的障害教育校)で行われてきた人権教育は、性教育を主とする内容であったり、性被害にあわないような教育であったりなどであり、人権課題を正面だって取り上げてきたことは少なかったように思われる。兵庫県人権・同和教育研究会阪神地区大会(以下、阪神人教)などでも、これまで県立特別支援学校より提出されたレポートは数が少なく内容も、性教育を中心としたものの、交流及び共同学習についての制度の紹介、就学猶予で義務教育の就学年齢を過ぎた方への制度(新就学プラン)の報告などであり、人権教育において取り組む人権課題(兵庫県教育委員会人権教育課ホームページ)についての報告は非常に少なかった印象である。これまでのレポート数の少なさについては種々の原因が考えられるが地元の市町の人権同和教育研究会等(以下、人権教等)に参加してこなかったため、人権教育についての地元との情報交換の機会が少なかったことも一因ではないかと考える。

そのような背景の中、人権教育を始めるにあたり一番心配配慮したことは、「担当者が交代しても継続して人権教育を実施する体制を作る」ということである。そのため、定期的にも人権教育に取り組む機会を設け全校で共通したテーマで授業をすることとした。他校(主として高等学校)では、学期に1回の人権ホームルームと講演会が一般的であったので、まず人権ホームルームの時間を設定することから始めようと考えた。

また、A特別支援学校開校と前後して、阪神地区高等学校人権教育研究協議会(以下、阪高人教:兵庫県の阪神間の公立、私立高等学校及び県立特別支援学校の加盟する人権教育団体)の発展的解消によりA特別支援学校は、地元のC市人権・同和教育研究会(以下、C人権教)に加盟することとなった。C人権教ではA特別支援学校も輪番で発表や役割が回ってくることとなり、職員会議等で輪番の件にもふれ人権教育を継続して指導する必要性についても説明した。

### 2. 初年度の取組み

他校の実践を参考に人権教育実施計画を作成し、研修会を中心に実施した。「虐待」についても講師を招き職員研修を行った。人権教育は総合的な学習の時間、防災教育、教科「情報」の中で行った。また、各種研修会に参加し他校の情報収集などに努めた。しかし、人権ホームルームの実施には至らなかった。

### 3. 2年目の取組み

前期と後期に各1回テーマを設定して人権教育ホームルームをもうけた。また、後期には講演会(DV防止)を合わせて行った。

前期のテーマは、「いじめについて考える(インターネットをつかったいじめ)」、後期のテーマは、「交際について考える」であった。

また、この年に県教育委員会人権教育課の訪問指導を受けた。訪問指導を機にA特別支援学校における人権教育のあり

方(知的障害のある生徒への人権教育)計画、方法、内容などを見直し、訪問指導に合わせ全校で人権学習の研究授業に取り組んだ。

後期のDV研修会では事前学習を行い、外部講師によるロールプレイを取り入れた講義形式で行った。単発の研修会ではなく、人権教育の学習の一環として研修会を含め3時間をかけて実施したことで、研修会での生徒の反応も非常に良く(熱心に聞いている様子が見られた、話し合い活動で活発に意見が出ていた、自分のこととしてとらえている様子が見られた、日常生活へのフィードバックがあった)、生徒にとって、実り多い内容になったと考えられる。また、本研修会を教職員、保護者も共に受けることでDVに対する考え方が浸透し、DV防止につながると考えられた。また、保護者に対して、講師より講演終了後別途簡単な講話があり、家庭での取り組みを話していただいたことも意義があったと思われる。

課題としては、①何度も繰り返し行う必要がある、②生徒がいきなり相談機関に連絡するのは困難であると考えられるので、教職員のさらなる研修が必要である、③障害特性上、自閉的傾向のある生徒の指導については、対人関係、コミュニケーションという視点からさらなる工夫や支援を学校として考える必要がある、などであった。

#### 4. 3年目の取り組み

3年目より、C人権教に正式に加盟し進路保障部会の一員として活動することとなった。校内の人権教育も輪番での発表をふまえ、さらに推進することを目標とした。12月に、日頃から携帯電話やインターネットを利用しているA特別支援学校生に対し、インターネットの向こう側に人間がいるということを再認識し、相手の気持ちを考えさせることを目的とした人権ホームルームを実施した。内容は「インターネット上の人権侵害」(総務省「インターネットの向こう側」より)であった。また、3年目よりC市教育委員会の人権啓発標語も全校で取り組み、人権に対する意識を高めることとした。しかし、前期には人権ホームルームを実施することができなかった。

「インターネット上の人権侵害」の授業後の職員へのアンケート集計結果(表1)より、人権教育を実施して、題材や生徒の反応はおおむね良いと考えられた。しかし、生徒が自分のこととして感じられない、教員の人権意識が求められる、難しいなどの感想があり、実際に指導したからこそその困難さも教員の側に多く感じられるという結果となった。

「インターネット上の人権侵害」の授業後の職員へのアンケート集計結果(表1)

<b>1</b>	<b>題材について</b>	①よい	19	②ふつう	1	③あまりよくない	0
<b>2</b>	<b>ビデオ教材について</b>	①よい	17	②ふつう	3	③あまりよくない	0
<b>3</b>	<b>生徒の反応</b>	①よい	14	②ふつう	4	③あまりよくない	0
<b>4</b>	<b>人権教育を行ってみて難しいと感じた点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・就職に関する人権問題(就職差別)</li> <li>・携帯電話を持っていない生徒はイメージしづらいそうだった。</li> <li>・生命と自由の確保の重要性を、漠然とか伝えられない。</li> <li>・ケータイを持っている生徒と持っていない生徒への対応。</li> <li>・ケータイを持っている生徒の仲でも、使用頻度や使っているSNSが異なっている点。</li> <li>・ケータイを持っていなかったり、インターネットしない生徒に関しては、伝え方が難しいと思った。</li> <li>・尊重、差別、偏見、難しいですね。</li> <li>・人権は多様なので、彼らには多くの視点を与えないといけないと思う。多様な中で、何を取り上げて伝えるかが難しい。</li> <li>・生徒の理解力。</li> <li>・なかなか生徒が自分の事と感じられない。自分は大丈夫と気持ちをもっていること。</li> <li>・教員の人権意識が求められる点。指導案どおりに進めても伝わらない。生徒にどういえば伝わるのかを熟知しなければいけないと感じました。</li> <li>・一時的で汎化が難しい。</li> <li>・1時間で終わるのは難しい。</li> <li>・主人公の気持ちになって考える事はイメージさせやすいと思ったが、その次に「どうすればよいか…」を検討させるのは難しい。</li> </ul>					
<b>5</b>	<b>今後人権教育で取り組んでみたい内容</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いじめ、友達同士の名前の呼び方(あだ名をつけたがっている。)</li> <li>・人権差別など。</li> <li>・出会い系サイトの危険性。</li> <li>・ケータイに送られてくる不審なメールや不審なサイトの危険性(お金が関わる事)。</li> <li>・いじめ、人間関係の築きかた。</li> <li>・インターネット弱者について。</li> <li>・友人関係、苦手な人との付き合い方。</li> <li>・いじめ(多様な面で)。</li> <li>・セクハラ、パワハラなどについて。</li> <li>・高齢者の生活上の問題(年齢の問題での社会参加の拒否、孤立、虐待など)。</li> </ul>					
<b>6</b>	<b>その他</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ネットに情報公開をすると、データ等を回収する事が難しい。非常にまずい状況になるという事が理解できたと思う。知らず知らずのうちにデータが公開されている事もある。写真を撮ると位置情報までついてくるので、公開された場合、気軽に撮った場合どこで撮影したのかわかるので怖いと思う。この部分を伝える事がむずかかった。</li> <li>・VTRを見て、話を聞いて、時間がもう少し欲しい題材だったと思います。</li> <li>・ビデオはとても良かったと思います。生徒の活動があるような(ロールプレイ)教材があればと思いました。</li> </ul>					

## 5. 4年目の取り組み

4年目より、確実に人権教育を実施するために人権ホームルームを年間行事の中に明記することとした。具体的には、中間考査の最終日の試験終了後の次の時間に行うこととして、指導略案等を総務部で準備し全校で同じ教材に取り組むこととした。(A特別支援学校は2期制のため年間2回実施)また、人権ホームルームとは別に学校全体を集めての講演会も学期末に実施した。講演会の内容は、人権教育の内容を受け、就労生活支援センターの職員を招き、就労後によくあるトラブルについての説明、困ったとき、差別を受けたとき等の相談窓口について事例を交えながら話をしてもらった。

前期の人権ホームルームでは、本格的に人権教育に取り組むこととした。(指導案参照)

題材は「ガイジ」という言葉である。前述の通り「ガイジ」という言葉は、開校当初から生徒の間で使用されているのを時々耳にすることがありずっと気になっていた。生徒の実態として「ガイジ」という言葉を、知的障害という意味が分かって使用している生徒と、意味が分からず単に友人が使っている悪口をそのまま使っている生徒がいると考えた。また、事前に総務部で指導案を検討する中で、適切な教材はないので、実態に合わせて各学年で取り組んでいくしかないということ、生徒は卒業後おそらく障害者差別にあうこともあるであろう、その時に差別に負けない生徒になってほしい、また、障害受容についても十分でない生徒も多く自分についてどのように受け入れていくかも課題として話し合われた。(指導案等参照)

### 【授業後の生徒の感想より】

○僕は今までその言葉を幾度となく耳にしました。ある時は陰で、あるときは冗談半分で直接言われたりもしました。そして自分も、その腹いせが知りませんがけんかの時や自分へ悪口を言っていた連中への悪口として言っていたこともありました。だからこそ、この言葉のなすことの重要性を知りいろいろな人へ言ってほしいと思います。

○ガイジという言葉の意味をきちんと知れたのがよかったです。ずっと障害があることがダメみたいに言われてきたけどそうじゃないんだとわかって安心しました。

○皆、色々、背負い込んで情けないなあと思いましたけども聞いてやさしく接しようと思いました。

とても勉強になりました。これから情けないことがあるかもしれませんがそれでもいい人間になろう、くじけず真っ直ぐ生きようと思いました。

○話を聞いていてしんどくなったけど私はつらかったことがなかったので大丈夫ですが聞きたくないなと思いました。どうして使うのか？療育手帳を持っているから。障害者に対して偏見があるから。意味を分かっていない。相手が障害者と思うから。

○今日は、人権ホームルームの授業は改めて考えさせられる授業でした。

### 【授業後の総務部としてのまとめ】

担当部で授業後の生徒の様子について話し合いを持った。

授業後は、「ガイジ」ということばは聞かれなくなった。少なくとも、意味がわからず使っている様子は見られない。また、悪いことばを使ってしまった場合教職員の方をうかがう様子が見られるなどの変化がみられる。といった意見が出された。

指導する時期については、

1年 早すぎたのでは、ないか。→中学のころを思い出す

2年 時期良かった

3年 社会に出ることを意識し良かった

これ以外にも、授業後にとった生徒アンケートよりこれまでに同級生などからかなりひどい言葉を言われている生徒がかなりいるという実態もわかり、今後の人権ホームルームの計画の参考資料としたいという意見も出された。具体的には、「ガイジ」という言葉ではなく、「サメ、ライオン、ジャガイモ」などの仲間内だけでわかる隠語を作りはじめが行われてきた形跡がある。「しね、消えろ、失せろ、ダボ、うざい」などと言われたり砂を投げられたりけられたりしたことがあるなどと直接的にいじめられている形跡も見受けられた。

### III. 考察

#### 1. 特別支援学校における人権教育

特別支援学校に在籍する児童生徒はもちろん何らかの障害を有する。そのうちほとんどの児童生徒は障害のため差別された経験を持つと共に差別した経験も持つ。これまで、特別支援学校での人権教育は、男女共生教育など性被害の被害者加害者にならないという視点で行われることが多かった。障害者差別について直接あつかうことは授業の対象の児童生徒は障害のある当事者であり、教員にとって十分な準備が必要であるためなかなか取り組みにくかったと考えられる。

A特別支援学校でも開校をきっかけに、生徒の実態から人権教育の必要性を感じ授業を計画したが、4年目ようやく「ガイジ」という言葉を題材に人権教育に取り組むことができた。途中、後退することもあったが高等部3年間の大枠の内容を組み立てることができた。特に内容について留意した点は、残念ながら現在も就労後も差別を受けることもあり、その際こは一人で悩まずに相談することがあるということを含めて伝えるようにした。差別に負けないというよりも、差別に向き合うという視点を大切に授業を組み立ててきた。

4年目に授業を実施するにあたり、担当部で何度も話し合いを持ち指導案の検討や授業の意味について考えた。教員にとってそれなりの覚悟のいる教材でありそのために、十分な検討が必要であったと思われる。そして、授業はほとんどが総務部に所属している教員が担当していた。「ガイジ」という言葉を取り上げることは、直接的には障害者に対する差別について取り上げることであるが、生徒にとって過去自らが受けてきた差別と向き合うことであり、自身の障害と向き合うこと、さらに今後受けるであろう差別と向き合うこと、そして、自らの持つ差別性と向き合うことでもあった。

人権教育を継続して行うために、訪問指導やC人権教での輪番なども使ってきっかけ作りを行ったり他校の情報収集を行ってきたりした。しかし、実施できない年があったり、時機を逸してしまい計画どおり実施できない年があったりした。試行錯誤の上、時期を決め必ず人権ホームルームを実施するようにした。開校以来、少しずつではあるが人権の授業を重ねることによって、教員の側も意識が高くなってきたように感じる。しかし、今後とも継続して人権ホームルームを含めた人権教育を実施していくためには、学年ごとに取り上げるテーマを決めること、年1回は「障害」についてとりあげることなどさらに工夫や実践、研修などを重ねていくことが必要であると感じている。

人権教育は人権ホームルームの時だけでなく、あらゆる機会をとらえて行うことが必要であるが、そのためには教職員の人権感覚を磨いていくことが必要であると重ねて感じた。教職員としての人権感覚を磨くためには、①まず人権教育を行う②各種の研修会や大会に参加する③実践を発表して意見を聞く④次の実践を磨くという繰り返しに加えて、差別の実態から学ぶことが必要である。

実際、部内での認識とは別に生徒の実態として、授業後言葉に対して意識する生徒は増加し「ガイジ」という言葉を発する生徒は減少したが、聞かれなくなったというところまでは至っていないのが実情である。

また、人権教育を学校全体の取り組みとするために他の部(生徒指導部、自立支援部)などともいじめアンケートや支援会議(いじめ対応委員会)の活用なども視野に入れなければいけない。

今回、これまでのA特別支援学校での取り組みを振り返りあらためて継続した取り組みの必要性、実践を振り返ることの大切さを感じた。

また、今後とも人権教育を継続していくために組織やシステムを構築するとともに組織やシステムを動かしていく人材の育成も継続的に必要であると痛感した。そのためにも、地元人権教とのつながり、継続的な研修体制、人権教育の実践、レポートの提出など途切れない実践を続ける体制を作ることなど改めて課題の大きさと多さに気づいたが休まず逃がずに取り組み続けていしか方法はないと考えられる。

本論文は、日本育療学会第20回学術集会抄録集(2016)で発表した内容に加筆修正したものである。  
参考資料として、指導案を添付している。

## 改訂版

## 第1回人権ホームルーム 指導略案

担当：総務部 人権係

- 1 日 時 平成27年6月3日(水) 中間考査終了後の1時限(45分間)
- 2 場 所 各ホームルーム教室
- 3 単元名 「ガイジ」という言葉について考える
- 4 ねらい ①ことばのもつ力について考え、使い方によっては人を傷つけることを知る。  
②障害のある人に対して向けられることのある言葉について考える。  
③卒業後、または就労後想定される場面に出会ったときの対応について話し合う。
- 5 単元設定に当たって

生徒のほとんどは、本校入学までにいやな言葉を言われたり、なかまに入れてもらえなかったりなどいやな思いをしてきている生徒がほとんどである。本校入学後は、同じ思いの友だちと多く出会うことで友だちと楽しく話したり、休みの日には近隣の大型商業施設で遊んだり、時には男女交際もするなど楽しく学校生活をしているように見える。しかし、一方生徒間で悪口のつもりか深く意味を考えずに「ガイジ」と言っている場面を見かけることがある。

「ガイジ」とは障害児より発生した言葉で、それまでの障害のある人に対する差別用語にかわり30年ほど前から聞かれるようになった知的障害者に対する差別意識を含んだ言葉である。最近あまり聞かれることはなくなってきたが、本校では開校当初より生徒より時々聞かれる。

これまでは、個々に指導してきたが、生徒の実態より指導の必要性を人権担当で検討し今回人権ホームルームで一斉に全校で取り上げることにした。

「ガイジ」とは、前述のように知的障害者に対する言葉であり、本校生徒に向けられることのある言葉である。そこで、指導に当たっては、過去の経験を振り返りことばの持つ力(攻撃性)に気づかせたい。その上で、「ガイジ」ということばを取り上げ、生徒間で少し変わっていることへの単なる悪口として使っていることばは、実は知的障害者に対する差別意識の含まれていることばであるとすることを指導する。その上で、今後生徒自身に対して「ガイジ」ということばが向けられたときにどう対応するかを話し合いにより考えさせたい。本単元は授業中で完結するものではなく、授業後も生徒の様子を見て気になる様子があればその都度指導の必要があると考えている。

授業をきっかけとして「障害」について考えることにもつながると想定し本単元を設定した。

なお、「障害」の表記であるが本授業では法令等に準じ「障害」のまま表記することとする。

- 6 準備物 筆記用具 ワークシート 振り返りシート

- 7 展開

	学習活動	指導上の留意点
導入 10分	○今まで言われていやだった言葉を発表する	ワークシートに記入後発表させる。



	ワークシートに記入後、発表する	あまり深入りせず、時間で区切るようにする。
展開 15分	○いやだったことばの中で「ガイジ」ということばについて考える 知っているか 言ったことがあるか 聞いたことがあるか ○「ガイジ」ということばは知的障害者にたいする差別意識を含んでいることを知る	導入で出ない場合は指導者が板書する。  厳粛な雰囲気です授業が進められるように配慮する。
発展 15分	○卒業後、就労先などで自分が「ガイジ」と言われたときの対応を話し合う 振り返りシート1,2に記入後発表 ・無視する ・上司に訴える ・やめてほしいと言う	自分のこととして考えることにより、差別に対する対処や障害受容についても考えさせる。
まとめ 5分	・本時の感想をワークシートに記入する	

### 文献 (References)

- 1) 中島栄之介：特別支援学校での人権教育の取り組みー「ガイジ」という差別用語に挑むまでー  
日本育療学会第20回学術集会抄録集（2016）日本育療学会